

〔資料〕

1993年以降の母子看護領域における家族看護学研究の動向

浅野みどり¹⁾ 立岡 弓子¹⁾ 杵淵恵美子¹⁾ 森 秀子²⁾ 宮里 和子²⁾

要 旨

我が国の家族看護学は一領域として認識されてからまだ日が浅いため、家族の概念や捉え方は一様でなく、拠って立つ理論や働きかけ方も様々な現状である。そこで、母子看護学分野の家族看護学研究の動向を探り、今後の研究の方向性や課題を明らかにしたいと考え、1993年8月～1999年4月の文献を対象にして、森の先行研究を参考に文献検討を行った。看護学和雑誌9誌から15のキーワード(乳幼児・小児と両親、家族、親子関係、ソーシャル・サポートなど)を用いて、101文献が検索された。その結果、健康レベルでは健康問題をもつ家族(68編)を、家族のライフサイクルでは養育期にある家族(74編)を研究対象としたものが多かった。研究目的では、対象の理解を目的とした研究(45編)が多く、健康問題をもつ家族における「母親の心理」「両親への関わり」「母子相互作用」などを研究課題の中心とした研究が多くみられた。また、森の結果と比較すると「家族役割」を研究課題とした研究の報告数が著明に増加していた。しかし、「母子相互作用」など限られた家族サブシステムへの関わりが中心であり、「家族の力量」など家族全体性への関わりはまだみえてきていなかった。また、理論的枠組を明確にした実践研究が少なく、我が国の母子看護領域における「家族看護の理論的枠組み」は十分なコンセンサスを得られていない現状と考えられた。以上の結果から、今後は理論的枠組を明確にして、「健康な家族」「教育期にある家族」「家族全体」へと研究対象を拡大した家族看護研究の発展が望まれる。

キーワード：母子看護領域、研究の動向、家族のライフサイクル、健康レベル、看護介入

1. 緒 言

北米では1970年代頃から家族そのものを看護の対象とする家族看護学が誕生し、1988年に国際家族看護学会が設立されている。日本においては、1992年に2大学に家族看護学講座が新設され、1993年に千葉大学大学院看護学研究科博士課程の設置記念事業として、「家族看護学研究の動向」と題する国際シンポジウムが開催された。これらを契機に我が国でも家族看護学に関する関心が高まり、1994年には日

本家族看護学会が発足し、家族看護学の研究や実践活動も活発になってきている。

しかし、日本では北米に比べ家族看護学が看護学の一領域として注目を集め出してからまだ日が浅いためか、家族の概念や捉え方は一様でなく、拠って立つ理論や働きかけ方も多様である。また、様々な看護の領域に広がるという家族看護学の特徴から、専門領域特有の考え方や方法論も存在しているようである。著者らが専門とする母子看護学領域においても、古くから家族は看護の対象として重要視されてきているが、その捉え方は様々で確立された理論はない状況にある。

そこで我々は、最近の母子看護領域における家族

1) 北里大学大学院看護学研究科博士後期課程

2) 北里大学看護学部

看護学研究の動向を探り、今後の研究の方向性や課題を明らかにしたいと考えた。本研究の目的は、1993年8月～1999年4月までに出版された和文献の検討によって、母子看護領域における家族看護学研究の動向と課題を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 文献検索

母子看護領域における家族看護学研究の動向については、森¹⁾が1988年1月～1993年7月までの日本の看護学雑誌6誌（日本看護科学会誌・日本看護学会集録—小児看護・日本看護学会集録—母性看護・日本母性衛生学会誌・看護研究・日本看護研究学会誌）を対象に文献検索を行い、前述の国際シンポジウムで発表している。森は文献検出にあたって、日本の研究現状では厳密な家族看護学の基準を適応することは時期早尚として、Gilliss²⁾の5つの基準（表1）の

表1. Gillissの家族看護学研究の包含基準

Criteria for Inclusion

1. 研究者の一人以上が、その学問分野のメンバーとして認識されている。
2. 研究課題が、臨床実践に根本的な関連性をもっている、または臨床現場において現在暗に問題になっているかどうか。
3. 理論的枠組みを試用している、または、研究の根底にその現象に関する新しい視点を発展させようとする試みがある。
4. 研究の方法が信頼できるものである；研究に科学的な価値がある。
5. 健康あるいは病気の家族集団の側面、家族役割、家族メンバー間の関係性、または、家族集団と環境（ソーシャルサポート、ヘルスケアシステム）との関係性に取り組んだ報告である。

Catherine L. Gilliss, et al; Toward a Science of Family Nursing. Addison-Wesley Publishing Company, 1989. P.39

表2. Gillissの第5の基準項目

1. 健康、病気を問わず家族集団
2. 家族役割
3. 家族成員間の関係
4. 家族集団と社会（ソーシャルサポート、ヘルスケアシステム）

うち第5基準に従っている。その基準は、研究の焦点が家族に関する4項目（表2）のいずれかについて報告しているということであった。我々は、研究の焦点を分類し森の結果と比較することで、その後の看護学研究の変化を明らかにできると考えた。また、わが国の母子看護領域の研究を家族看護学の明確な視点でレビューした研究は他になく、森の文献を追従することが妥当であると判断した。

そこで、我々は森の文献を参考に「日本看護関係文献集」と「医学中央雑誌」CD-ROM版を用いて、1993年8月から1999年4月までの文献検索を行った。しかし、①1994年には家族看護学が発足し1995年から学術雑誌発行を開始していること、②家族看護学への関心の高まりから地域看護学、助産学関係の学会誌にも家族看護学研究論文の掲載の可能性があることを加味する必要があると考えた。従って、検索雑誌に関しては日本助産学会誌、日本家族看護学会誌、日本看護学会集録—地域看護の3誌を追加し、9誌を対象とした。さらに、検索キーワードは森の用いたものに「妊産婦」を追加した15種類の用語とした（表3）。

2. 文献の分類および分析方法

検索抽出した文献は、3人の研究者が分担して詳察した。各文献について、中西³⁾、森⁴⁾の研究を参考に、表4に示した6項目に関して分類を行なった。各研究者が分類にあたって少しでも判断に迷う場合には、3人で再度抄読・検討して分類した。各文献に関

表3. 検索に用いたキーワード

1. 乳幼児・小児と母親
2. 乳幼児・小児と父親
3. 小児と両親
4. 家族
5. 母親役割
6. 父親役割
7. 親役割
8. 妊産婦
9. 母子関係
10. 父子関係
11. 親子関係
12. 夫婦関係
13. 家族関係
14. ソーシャルサポート
15. ヘルスケアシステム

表4. 各文献に関する分類項目

- 1) 発表年月
- 2) 研究者の背景（研究報告者所属／臨床との共同研究の有無／研究助成の有無）
- 3) 研究目的
- 4) 研究方法
- 5) 研究対象（ライフサイクル段階／健康レベル）
- 6) 研究の焦点（Gillissの第5基準）

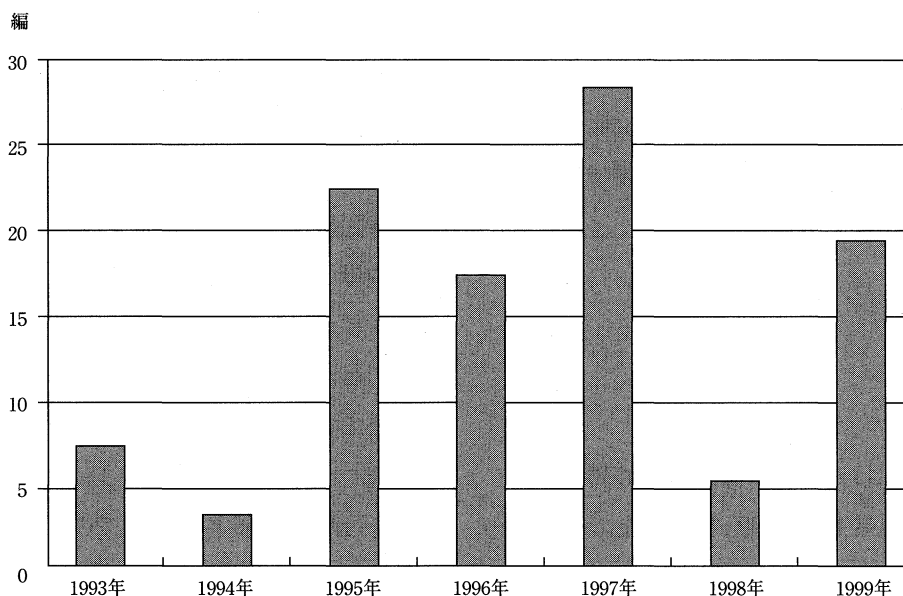


図1. 文献報告数の年次推移

表5. 結果の概要

第一著者の所属	教育・研究	26	実務	73	その他	2
単著・共著の別	単著	16	共著	85	共著のうち臨床との協同	15
対象のライフサイクル	養育期	74	教育期	12	両期を含む	15
対象の健康レベル	健康群	26	健康問題群	68	両群を含む	7
介入の焦点 (Gilliss の第5基準)	家族集団	38	家族役割	28	家族成員間の関係	23
					家族集団と社会	12

する6項目の分類内容をExcel 2000にデータ入力し、単純集計後にそれぞれの分類項目の傾向について分析した。

III. 結 果

1) 報告数の年次推移

母子看護領域における家族看護学研究として、和雑誌9誌から合計101文献が検索抽出された。抽出した101文献のリストについては、資料として文末に添付した。年次別に見ると、1993年7編、1994年3編、1995年22編、1996年17編、1997年28編、1998年5編、1999年19編であった。年次毎のばらつきは大きいものの、1995年以降は1998年の落ち込みを除いて年間約20編で、ほぼ横這い傾向であった(図1)。

2) 研究者の背景

筆頭研究報告者の所属については、表5に示すとおり教育・研究機関に属している論文が26編(26

%)、病院等の実務機関に属している論文が73編(72%)、その他として大学院生による論文が2編(2%)であり、実務者による報告が多かった。

単著・共著別にみると、101文献のうち単著16編(16%)、共著85編(84%)と共著が圧倒的に多かった。共著85編のうち、教育・研究機関の研究者と臨床実践者による共同研究報告論文は15編(18%)であった。また、研究助成を受けて研究を行った論文はわずか1編であった。

3) 研究目的

研究目的別分類では、「対象の理解」を目的とした論文が45編(44%)と最も多く、次に「ケア方法の開発」に関する論文が16編(16%)、「実態調査」12編(12%)、「家族の理論と概念構築」に関する論文が8編(8%)の順であった。家族の関係性やtoolの開発検討を目的とした報告はそれぞれ3編、5編と少なかった(図2)。「家族の理論と概念構築」や「toolの開発検討」を目的とした文献の多くは、日本看護科学学会誌に掲載されているものであった。

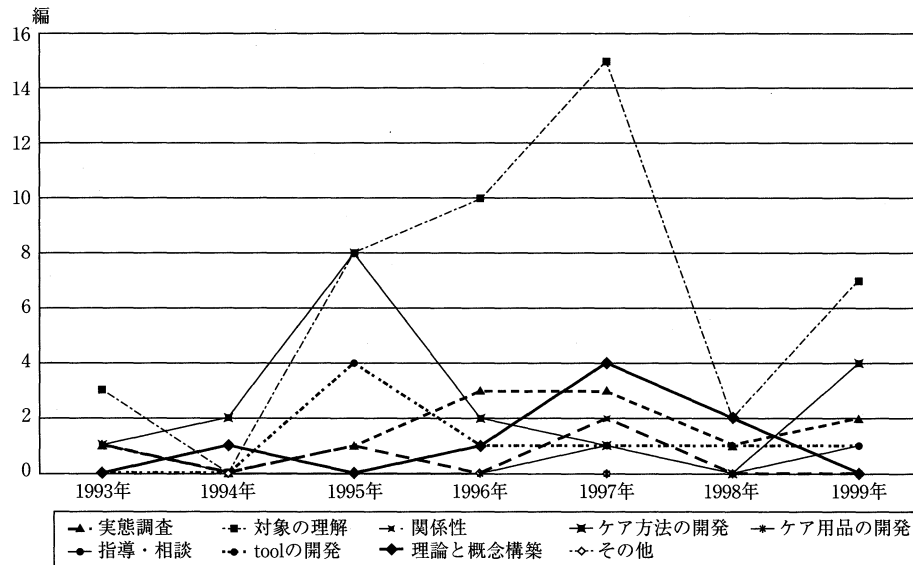


図2. 研究目的分類別の年次推移

また、研究目的別の年次推移では、「対象の理解」「ケア方法の開発」を除いて、年間0～4編での推移と変化が少なかった（図2）。

4) 研究方法

質問紙法によるもの35編（35.3%）、事例検討26編（25.5%）、質的研究21編（20.6%）の順で多く、その他の19編は質問紙法と観察法（VTRを含む）のように2つ以上の研究方法を用いているものなどであった。しかし、このうち2編は研究方法や研究データとして何を使用したかが明示されていないため、分類不能であった（いずれも日本看護学会－母性看護）。研究方法における経年的特徴は特にみられなかった。

5) 研究対象

研究対象については、ライフサイクル段階と健康レベルの視点から検討した（表5）。

(1) ライフサイクル段階

家族社会学者である望月ら⁵⁾は家族ライフサイクルを7段階でとらえている。この場合、母子看護領域の研究対象は、主として「養育期」と「教育期」の家族に該当する。研究対象の家族のライフサイクル段階について文献数からみると、胎児を含めた「養育期」に関する研究報告は74編、「教育期」に関する研究報告が12編、「養育期から教育期」にまたがっ

表6. 研究課題の中心

健康群		健康問題あり群	
母子関係	6	母親への関わり	8
夫婦関係	1	母親の心理	17
父親役割取得	1	両親への関わり	8
両親への関わり	2	両親の心理	5
母親役割取得	7	両親の意見	3
家族役割取得	4	両親の行動	4
家族関係	1	母子相互作用	7
家族の心理	3	その他	16
育児支援	1		
合計	26	合計	68

た研究報告は15編であった。

(2) 健康レベル

健康レベル別にみると、「健康問題あり群」を対象にした研究報告が68編と最も多く、次いで「健康群」を対象にした研究報告が26編、「健康問題あり群」と「健康群」の両レベルを対象にした研究報告が7編であった。研究対象として「健康問題あり群」を取り上げた研究が多く、「健康群」を対象とした研究の2.6倍であった。しかし、1996年以降、「健康群」を対象とした報告が増加傾向を示してきており、健康な家族が研究対象として取り上げられるようになってきていることが特徴として挙げられた。

6) 家族看護学研究の焦点（課題）

(1) 健康群の研究課題の中心

「健康群」の研究の課題（表6）は、「役割取得」

に関する研究が13編で約半数を占めた。このうち、「母親役割取得」をねらいとしたものが最も多く7編、次いで「家族役割取得」が4編、「父親役割取得」が1編であった。また、「母子関係」6編、「家族の心理」が3編、「両親への関わり」が2編、「家族関係」「育児支援」が各1編であった。

ライフサイクルからみると、「健康群」の26編のうち25編が「養育期」を対象とした研究で、1編のみが「教育期」の研究であった。

(2) 健康問題あり群の研究課題の中心

「健康問題あり群」の68文献中、既存のカテゴリー(表6)に分類できた研究は52編であった。このうち、「母親の心理」に関するものが17編と最も多く、次いで「両親への関わり」、「母親への関わり」が各8編、「母子相互作用」7編、「両親の心理」5編、「両親の行動」4編、「医療機関(者)に対する親の意見(要望)」が3編の順であった。

また、既存のカテゴリーには当てはまらず、「その他」と判断された研究が16編と多く、「健康問題あり群」全体の約24%を占めていた。「その他」に分類された論文の内容を詳細にみると、「看護職の関わり」に関するものが5編と最も多く、次いで「父親」「同胞」に関するものが各4編であった。また、「家族の受容過程」2編、「家族の力量」1編であった。

ライフサイクルからみると、「健康問題あり群」の42編が「養育期」、11編が「教育期」を対象とした研究で、やはり「養育期」が研究課題の中心であった。

(3) 看護介入の関心の焦点について(Gillissの第5の基準項目)

研究における看護介入の関心の焦点について、Gillissの第5の基準項目(表2)によって分類した結果を以下に示す。4カテゴリーの中で最も多かったのは、家族集団について38編(39%)で、次いで、家族役割28編(28%)、家族成員間の関係23編(23%)、家族集団と社会12編(12%)の順であった(表5)。

IV. 考 察

この調査は、前述の森⁶⁾の文献に基づき引き続いてその後の動向を探ったものであるため、森の結果との比較を中心にして考察を述べる。

1. 報告数・研究者の背景について

検出された文献数は、1995年以降は年間約20編と1993年、1994年の1桁台と比較して急増していたが、今回の全検索期間5年8カ月間の総数では、検索学術誌数を増やしたにも関わらず101編にとどまっていた。

森の研究も5年7カ月(1988年1月～1993年7月)とほぼ同じ期間における検索であるが129文献と報告されている。このことから、母子看護領域における家族看護研究報告数は、この数年間で増加傾向にあるとは言えず、むしろ、コンスタントに関心を持ち続けられているのではないかと考えられた。「わが国では家族が援助の対象として注目され始めたのは1960年頃からであり、母子看護領域から母子関係を中心に家族の問題に目を向けてきた」⁷⁾とされているように、母子看護領域は他の看護領域に比べ早くから家族の看護に関心をもって取り組んできており、研究テーマとして定着してきている結果ではないかと考えられた。1998年の論文数が少ないのは、「日本看護学会集録」が「日本看護学会論文集」に変わり発行時期が変更されたことによる影響と思われる。また、今回の研究では看護学領域の学術雑誌に掲載された文献だけを検索の対象としているため、「小児保健研究」「学校保健研究」「思春期学」など、看護学以外の研究者を広く学会員とした学術雑誌については検索の対象外としている。しかし、これらの学術誌にも家族看護学研究が掲載されている可能性があり、今回の研究結果は、この点で研究の限界を有している。

研究報告者の背景では、筆頭著者の所属は73編(72%)が病院等の実務機関であったが、森はこのことについては触れていないため直接的な比較はでき

ない。しかし、やや時代を逆のぼるが1968～1977年の10年間ににおける「看護研究」誌上における看護研究の動向に関する中西の報告⁸⁾および、嶺岸らのがん看護実践領域における10年間(1988～1997年)の研究に関する報告⁹⁾では、共に70%以上が大学・教育研究機関に所属していたという結果があり、これらと比較すると逆の結果であった。これは、今回検索した学術雑誌の中に「病院等の実務機関に所属する臨床看護実践者の発表者が比較的多い」と言われている日本看護協会主催の「日本看護学会集録－母性看護・小児看護・地域看護」の3誌が含まれていることによるものと考えられた。さらに、母子看護領域では実践現場での家族看護への関心も高いことから実務機関に所属する筆頭著者が多数を占めたものと考えられた。

また、共著による文献が84%を占めているが、実務機関と研究・教育機関との共同研究はこのうち18%にとどまっており、前述したように実践現場での家族看護に対する関心が高いことを考慮すると、今後の研究協力の発展と充実が望まれる。

さらに、今回の結果では「研究助成を受けた」という記載のある文献はわずか101編中1編と非常に少なかった。文部省科学研究費補助金の「医学一般」5細目における“看護学”の採択研究課題数は、平成4(1992)年度58件(20.3%)から平成8(1996)年度には173件(39.4%)¹⁰⁾と年々増加傾向にある。この現状を考えると、今回の結果は予想外に少なかった。その原因として考えられるのは、これらの研究が学術雑誌ではなく報告書としてまとめられている可能性、あるいは、各学会等での研究成果発表はなされていても未だ原著論文として掲載されていない可能性、および他雑誌へ投稿されている可能性などである。加えて、少子高齢化社会が大きな社会問題になっているとはいえ、介護保険制度の導入など一連の高齢化に対する社会的危機感や政策的関心に比べ、母子領域に直結する「少子化」に対する危機感や政策的関心の低さを反映しているのではないかということが危惧された。さらに、文部省科学研究費補助金(基

盤研究、萌芽的研究、奨励研究)における平成11年度採択状況では、医学研究に占める看護学研究比は採択課題件数でわずか3.3%、配分額では2%程度との報告¹¹⁾がある。CureよりCareの時代といわれる時代背景を考慮すると、看護学領域は今後さらに研究助成金獲得に向けた努力が必要と考えられた。

2. 研究目的・研究方法について

研究目的をみると、対象の理解(45%)・ケア方法の開発(17%)・実態調査(12%)の上位3項目で全体の7割強を占めている。しかし、今回の結果では家族看護理論や概念の構築・ツールの開発に取り組んだ研究も、大学など教育・研究機関の研究者を中心に約13%みられた。前述の森の文献では「病児をもつ家族へのかかわりの検討にとどまっており、看護方法の開発の研究はほとんどない状態だった」と指摘されている。これらの結果と比較すると、この面における家族看護学研究的の進歩・発展の兆しがみられたと判断できるものと考ええる。

一方、研究方法について述べると、質問紙法(35.3%)、面接などの質的研究(20.6%)を併せた調査研究は約56%を占め、中西、嶺岸らの結果に比べ5～10%程度高かった。なお、これらの文献における「研究方法の分類」の仕方にはそれぞれ若干の相違があるため完全な比較はできないが、今回の結果では実験研究ではなく、質問紙調査研究、事例研究が多い傾向にあった。これは、以下のような家族看護学研究の特徴によるものではないかと推察できた。ひとつは、Friedman¹²⁾がそれぞれの家族のuniquenessを理解する努力が必要だと指摘しているように家族には多様性があり、介入するにあたって厳密な変数の操作が困難であることが考えられる。さらに、複雑な家族の相互作用、家族ダイナミクスの説明には、疫学モデル(直線的因果関係モデル)は単純過ぎて不適切であること¹³⁾が考えられた。

また、研究の理論的概念枠組みを明確に示した研究やアセスメントツールの開発を目指した研究は極限られた学術誌上でしかみられず、看護学研究全体には浸透していないことを示すものと考えられる。

加えて、検索文献の72%が実践現場に所属する筆頭著者によるものだったことも影響している可能性がある。今回の結果では、理論的概念枠組を明確にした研究、アセスメントツールの開発を目指した研究の絶対数が少なかったことから、わが国の母子看護領域で用いられる主要な「家族看護の理論的枠組み」、「家族アセスメントツール」の形式がとくに見いだせなかったと考える。今後は、Gillissの第3、第4基準に示されている様に、既に提唱されている理論的枠組やツールを積極的に実践現場で活用し、有効性を検証する研究の発展が望まれる。

3. 研究対象のライフサイクルおよび健康レベルについて

家族のライフサイクル段階からみると、養育期の研究が7割以上を占め、森の結果より若干低いものの類似した傾向にあった。「新しい家族の誕生により親役割を獲得し、新しい家族関係を形成する」という新たな課題を前にして、様々な問題が起こりやすいこと¹⁴⁾¹⁵⁾はよく知られており、この時期の看護介入に対する関心の高さを反映する結果といえる。また、教育期、および養育・教育期を通じた研究は微増傾向にあるがまだ十分とは言えない。これは、教育期の対象が、健常児の場合は主として学校保健の範疇でカバーされており、多くの看護職は直接接触する機会が少ないこと、学童期は通常罹患率が低い時期であることから、研究対象としにくいことも影響していると考えられる。しかし、今日のいじめ、思春期の問題行動の増加などにみられる社会的背景、さらに小児期からの健康的なライフスタイルの確立の重要性¹⁶⁾を考慮すると、第1次予防が家族看護の主要な実践であるという観点からも、今後は学校保健との連携を推進し、教育期を対象とした研究の発展が必要だと考えられる。

健康レベル別にみると、「健康問題あり群」を対象とした研究は、森の82.3%という報告よりは若干低かったが70%と多く、研究者の主要な関心は「健康問題あり群」の家族であった。これは、病院等実践機関に所属する研究者が7割と多かったことをふまえ

ると当然の結果と考えられる。しかし、先にも述べたように1996年以降は「健康群」を対象とした研究が含まれるようになってきている。健康的なライフスタイル獲得にあたって学童期の及ばず影響の重要性を考慮すると、生活習慣病予防の観点からも「健康群」の家族に関する研究の発展が望まれる。

また、「健康問題あり群」では、ライフサイクル段階別にみて「教育期」を対象とした研究の割合が「健康群」に比べて若干多く、入院・通院中の学童については看護研究の対象として得やすいためであろうと考えられた。

4. 家族看護学研究の焦点(課題)について

「健康群」における研究の課題は、「役割の取得に関するもの」が半数を占めていた。森の報告では、「日本においては、母親役割、父親役割、家族役割に一定の概念化がまだなされておらず、研究を困難にしている」と指摘されていたが、今回の結果からはこの課題についても徐々に取り組まれてきているということが確認できたと考ええる。また、研究の関心は「母親役割取得」が最も多いものの、「父親」「きょうだい」「祖父母」などの家族役割へと研究の関心に広がりを見せていた。

「健康問題あり群」においては、「母親の心理」「母親への関わり」など母親に関することがやはり多く、看護者が子どもの重要他者としてもっとも認識しているのは「母親」であることが改めて確認できた。また、注目すべきこととして、森の報告では5%弱であった「その他」に分類される研究が24%に急増している。「父親」「きょうだい」「家族の受容過程」「家族の力量」など研究の視点が広がってきていることを示していると考えられた。

わが国の母子看護領域における家族看護学研究の特徴について、森はGilliss¹⁷⁾の第5の基準に沿って考察している。しかし、森の報告では、各項目に関する文献数をすべて明らかにして述べてはいないので、この報告との大きな相違点についてのみ考察を述べる。もっとも顕著な項目は、先にも触れたが「家族役割」で全体の27%を占め、森の報告5件と比較する

と約6倍近くの報告数を示し、発展の兆しが明確になった。また、「家族集団と社会」について森の報告では「ほとんどなかった」としているが、今回の研究では12編(12%)と増え、とくにソーシャルサポートに関する研究が目立っていた。これは、検索雑誌の一つに「日本看護学会集録-地域看護」を加えたことも影響していると考えられるが、日本看護科学学会誌上においては小児看護領域(文献No.64 中村ら)、母性看護領域(文献No.60 喜多)のそれぞれにソーシャルサポートに関連した原著論文がみられた。「家族集団と社会の関係性」という家族とその上位システムである社会との相互作用に対する関心は、地域の看護職に限られたものではなく母子看護領域の看護職へと広がりを見せていると考えられた。

一方、Gillissの理解では「家族集団」について「集合体としての家族全体」を示していると思われるが、本研究の対象となった研究では「家族集団」とはいえ「病児の母親」「病児の父親」など家族サブシステムに対する看護者の関心や看護者の関わり方への関心であった。したがって、我が国の母子看護領域における研究は病児を抱える家族の一部に対する看護介入が主であり、家族の全体性への関わりはまだみえてきていないという印象を受けた。つまり、Friedman¹⁸⁾の示す家族看護実践のレベル3 (Family Subsystem as Client) についての研究はみられ始めているが、レベル4 (Family as Client) には至っていないと考えられる。

5. 今後の研究の方向性と課題

今回、わが国の母子看護領域において十分コンセンサスの得られた「家族看護の理論的枠組み」や「家族アセスメントツール」というものは見出せなかった。そのため、各々の研究結果の統合や臨床実践現場で直ちに有効活用することは難しい現状にあると考えられる。今後は、Gillissの第4基準にあるように、信頼できる研究方法を用いた研究をすることで、例えば各研究結果をメタ分析によって統合し、臨床実践に活かすなどの努力が必要であると考えられる。一方、最近になって家族看護学会第6回、第7回学術集会

ではカルガリーモデルを用いた介入の実践活動報告^{19),20)}がみられるようになってきた。これは、Wright²¹⁾が前述のシンポジウム(1993年)で Interventionの重要性を強調しているように望ましい現象であり、今後ますます実践的家族看護介入研究の発展が望まれる。また、母子関係、父子関係、夫婦関係という家族サブシステムだけでなく、家族集団や家族全体のダイナミクスを対象とした研究方法の確立、推進が切望される。

最後に、理論的枠組を明確にした実践研究をさらに推進することが、わが国の母子看護領域における看護実践場で活用できる研究成果をもたらす、家族看護学の発展に寄与するものと確信している。

〔受付 '00. 4. 3〕
〔採用 '00.12.25〕

引用・参考文献

- 1) 森 恵美：日本の母子看護領域における家族看護学研究の動向。看護研究, 27(3) : 43-48, 1994
- 2) Catherine L, Gilliss et al: Toward a Science of Family Nursing. Addison-Wesley Publishing Company, 1989. P.39
- 3) 中西睦子：看護学研究最近の動向—過去10年間に掲載された“看護研究”誌上の研究報告を中心として—。看護研究, 11(1) : 1-11, 1978
- 4) 前掲書1)
- 5) 望月 嵩, 本村 汎：現代家族の危機—新しいライフスタイルの設計。有斐閣, 1996
- 6) 前掲書1)
- 7) 渡辺裕子, 鈴木和子：家族看護学—理論と実践—第2版。日本看護協会出版会, 1999
- 8) 前掲書3)
- 9) 嶺岸秀子, 遠藤恵美子：日本における過去10年間(1988~1997)のがん看護実践領域における研究の概観と今後の課題。日本がん看護学会誌, 13(1), 1999
- 10) 竹谷英子：連載「わかりやすい看護の経済学」最終回。看護, 52(2) : 89-93, 2000
- 11) 前掲書10)
- 12) Friedman, Marilyn M: Family Nursing: Research Theory & Practice 4th edition. P.26, APPLETON & LANGE Stamford, 1997
- 13) Nelson Deborah B, Edgil Ann E: Family Dynamics in Families With Very Low Birth Weight and Full Term Infants; A Pilot Study. Journal of Pediatric Nursing, 13(2) : 95-104, 1998
- 14) 久常節子, 島内 節, 編：地域看護学講座6 母子地域看護活動論 第2版。医学書院, 1999
- 15) 平山朝子, 宮地文子, 編：公衆衛生看護学大系3 母子保健

指導論 第3版. 日本看護協会出版会, 1999

- 16) 福渡 靖, 他: 厚生省心身障害研究「小児期からの健康的なライフスタイルの確立に関する研究」平成7年度報告書.
- 17) 前掲書 2)
- 18) 前掲書 12) P.33
- 19) 立岡弓子, 他: 未熟児を出産するに至った夫婦の意思決定への看護介入について. 日本家族看護学会第6回学術集会抄録集: P.52
- 20) 堤 淳子: 寝たきり患者の在宅介護に向けての家族に対する看護支援—カルガリー看護アセスメントモデルを用いた一事例—. 家族看護学研究 6 (1) 第7回学術集会抄録: P.79
- 21) Wright Lorraine M, Bell Janice M: 基調講演—家族看護学研究の将来. 看護研究, 27(2-3): 4—15, 1994

〔資料〕調査に使用した研究論文
(年次別, ABC 順)

1993 年

- 1) 井上敏子: 乳幼児の入院における母親付添いの意義と看護婦の役割—母親へのアンケート調査から—, 第24回日本看護学会集録 小児看護, 86—89, 1993
- 2) 木下佐和子: ベビーバス沐浴と家庭風呂入浴に見る母子相互作用の密度の相違, 第24回日本看護学会集録 母性看護, 112—114, 1993
- 3) 仁見敦子, 他: 入院時にまつわる医療事故の防止, 第24回日本看護学会集録 母性看護, 161—163, 1993
- 4) 玉井由紀子, 他: 安産教室の再検討, 第24回日本看護学会集録 母性看護, 168—171, 1993
- 5) 成田 伸, 前原澄子: 母親の胎児への愛着形成に関する研究, 日本看護科学会誌, 13(1), 1—9, 1993
- 6) 松村京子, 他: 外国人妊産婦に対する不安緩和の保健指導, 第24回日本看護学会集録 母性看護, 237—239, 1993
- 7) 吉川哉子, 他: 母子関係確立における看護者のかかわり方, 第24回日本看護学会集録 母性看護, 73—75, 1993

1994 年

- 8) 中村小百合, 他: 未熟児の母親の母児接触欲求時期に関する研究, 第25回日本看護学会集録 小児看護, 71—73, 1994
- 9) 野嶋佐由美: 慢性疾患患児を抱えた家族システムの力と家族対処の分析, 日本看護科学会誌, 14(1), 28—37, 1994
- 10) 鈴木多実子, 他: 母親の協力が望めない肥満児の情緒的支援, 第25回日本看護学会集録 小児看護, 31—33, 1994

1995 年

- 11) 江口恵子, 文珠紀久野: 先天性心疾患をもつダウン症児の母親の障害受容に関する研究看護と心理の連携, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 101—104, 1995
- 12) 藤原千恵子, 他: 乳児をもつ父親の養育態度の形成に関する研究生後3カ月と8カ月における変化, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 45—48, 1995
- 13) 早川 香: 小児がん患児の発症から退院後現在までに母

親が経験した葛藤, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 88—91, 1995

- 14) 広瀬幸美, 他: 先天性心疾患乳幼児をもつ母親のケアニーズ, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 124—126, 1995
- 15) 本田景子, 他: 子どもの入院による父親の役割と関わりの変化, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 49—51, 1995
- 16) 伊吹多香子, 他: 小児の在宅ターミナルケアにおける両親への援助看護取りへの援助を中心に, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 63—65, 1995
- 17) 伊藤良子, 他: 思春期クローン病女児と家族のセルフケアへの援助, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 15—17, 1995
- 18) 神谷加代子, 他: 障害児をもつ家族への看護介入—受容過程とケアニーズアセスメント用紙の開発—, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 232—234, 1995
- 19) 加藤仁美, 他: 手術を受ける児の家族が持つ時期別の不安内容と家族が求める援助, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 34—37, 1995
- 20) 小森鎮枝, 熊木孝子: 子どもの入院が家族・同胞に与える影響, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 81—83, 1995
- 21) 間島かおり, 他: 先天性心疾患児に対し手術を受けないことを選択した両親と患児への援助—在宅ケアを通して—, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 59—62, 1995
- 22) 小口多美子: 小児の入院における父親の付添状況の分析, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 52—55, 1995
- 23) 桶矢靖子, 他: 超低出生体重児を出産した母親が児を受容するまでの関わり, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 120—123, 1995
- 24) 斉藤咲子, 他: 新生児診療相互援助システム入院により母子分離された母親の不安軽減の援助, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 127—129, 1995
- 25) 坂口直子: 虐待が疑われる心身症女児の母親への援助, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 145—147, 1995
- 26) 佐藤多恵子, 他: 入院中の4～5歳児の就床時に母親の声を聞かせることの効果, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 252—254, 1995
- 27) 鈴木真知子: 人工呼吸器を装着した子どもの在宅療養を選択する親の認識に関する研究—認識の変容過程—, 日本看護科学会誌, 15 (1) 28—35, 1995
- 28) 鈴木真知子, 他: 親と看護婦における子どもの状態判断に関する認識の比較—その子の方—, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 187—190, 1995
- 29) 土田美穂: 小児の内服についての母親の意識調査, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 113—116, 1995
- 30) 外山恵理: 小児のターミナルにおける母親への援助—当病院で死を迎えた母親へのアンケート調査より—, 第26回日本看護学会集録 小児看護, 25—27, 1995
- 31) 渡邊久美子, 筒井真優美: 長期入院患児の同胞の行動変化のプロセス—母親の認識に焦点を当てて—, 第26回日

本看護学会集録 小児看護, 84—87, 1995

- 32) 吉本 妙, 他: 極小未熟児を出産した母親の感情の特徴,
第26回日本看護学会集録 小児看護, 163—166, 1995

1996年

- 33) 出沢愛実, 他: 溺水により児が脳死状態と宣告された両親への援助—早期に意思表示されたケースから—, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 188—190, 1996
- 34) 本田景子, 他: 障害を持ち退院する子どもの母親の気持ち, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 136—139, 1996
- 35) 本間裕子, 他: 妊娠・分娩・産褥過程における母親の胎児感情に影響する要因—初産婦・経産婦別の特徴—, 第27回日本看護学会集録 母性看護, 96—99, 1996
- 36) 堀内美佐: 家族のサポートと妊婦の母性意識の発達, 母性衛生, 37 (2), 293—298, 1996
- 37) 堀田道代, 他: 食道閉鎖症グロスA型患児の経口摂取への援助 経口摂取練習を継続的に進める事で一時退院を実現した事例, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 129—131, 1996
- 38) 一宮茂子, 他: 生体部分肝移植家族の退院後の健康管理—面接調査による拒絶反応の早期発見と感染予防の実態—, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 77—80, 1996
- 39) 河合みどり, 他: 小児の訴え, 表現方法の理解と援助—児・母親・看護者の関係を通して—, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 20—22, 1996
- 40) 小谷 忍, 他: 母親と看護婦の看護援助に対する満足度, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 23—25, 1996
- 41) 三留節子, 他: 母体搬送入院における妊産婦の心理, 情緒的反応—搬送の転帰から出産し退院に至るまでの聴きとり調査から—, 第27回日本看護学会集録 母性看護, 11—13, 1996
- 42) 森 信子, 他: 慢性疾患の児を持つ母親との精神的な関わり—インスリン依存型糖尿病児の看護を通して—, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 184—187, 1996
- 43) 向川陽子, 服部満生子: 病児の入院時に家族が抱える問題とその支援, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 8—10, 1996
- 44) 難波美奈, 他: 低出生体重児退院へ向けての母親への支援 当院における母子関係確立への試み, 母性衛生, 37 (2), 289—292, 1996
- 45) 西尾美和, 筒井真優美: 患児の入院に対する同胞の気持ち, 第27回日本看護学会集録小児看護, 11—13, 1996
- 46) 野間口千香穂, 他: 高位鎖肛で手術した小児の母親の思い, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 14—16, 1996
- 47) 染野由美子, 小林 薫: 超低出生体重児の直接哺乳と母親の愛着形成の変化, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 73—76, 1996
- 48) 田島朝信, 他: 十代妊娠の家族的背景とその帰結, 母性衛生, 37 (2), 179—187, 1996
- 49) 上田紀美子: NICU入院時の父親における面会日記の意味, 第27回日本看護学会集録 小児看護, 70—72, 1996

1997年

- 50) 枝川千鶴子, 他: NICU面会時における家族空間作りの効

果一部分的遮蔽空間の有無による面会状況の比較—, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 194—196, 1997

- 51) 藤原里美, 他: 育児不安を持つ母親に対する家族支援の検討, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 164—166, 1997
- 52) 福島道子: 「家族の健康課題に対する生活力量アセスメント指標」の開発, 日本看護科学会誌, 17 (4), 29—36, 1997
- 53) 福島弥生, 他: 重症新生児仮死児と意識のない妻への症状不安が強い父親の愛着形成に向けての援助, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 109—111, 1997
- 54) 濱田佳代子, 他: 初産褥婦の家族の対応による心理的動揺の分析, 第28回日本看護学会集録 母性看護, 112—114, 1997
- 55) 服部スマ子, 臼井久子: 重症男児の3年間面会のなかった家族への援助, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 207—210, 1997
- 56) 今井 恵: 子どもの入院に付き添う母親に関する研究—民族看護学の研究方法を用いて—, 看護研究, 30 (2), 33—45, 1997
- 57) 井上孝子, 他: 幹細胞移植後の子どもの容姿変化による母親のストレスコーピング, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 112—114, 1997
- 58) 石井邦子, 他: 妊娠期における母親役割プロセスと共感性の関連について, 日本看護科学会誌, 17 (4), 37—45, 1997
- 59) 交野好子: 妊婦の胎児認知と想像, 母性衛生, 38 (2), 288—296, 1997
- 60) 喜多淳子: 妊婦が認知するソーシャル・サポートとソーシャル・ネットワークの質についての検討 (第一報), 日本看護科学会誌, 17 (1) 8—21, 1997
- 61) 町田美香, 他: 気管カニューレ装着中の患児・家族への援助—在宅療養へ向けて—, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 20—23, 1997
- 62) 宮坂美和子, 他: 在宅障害児と母親への新しい看護の取り組み—遊びと面談とを糸口として—, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 17—19, 1997
- 63) 宮田隆子: 乳幼児突然死症候群 (SIDS) により子どもを失った母親の思い, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 105—108, 1997
- 64) 中村美保, 他: 慢性疾患患児と健康児のソーシャルサポート, 日本看護科学会誌, 17 (1) 40—47, 1997
- 65) 野村幸子: 母親の育児不安にソーシャルサポートの与える影響, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 157—160, 1997
- 66) 野村紀子: 周産期の母親をとりまく要因のMMPIによる分析, 母性衛生, 38 (2), 266—276, 1997
- 67) 小栗明美, 他: 母親が付き添うことに関する看護婦と母親の思いのズレの検討, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 72—75, 1997
- 68) 岡 靖子, 他: 低出生体重児を持つ母親の育児不安に関する研究—状態・特性不安尺度 (STAI) を用いた分析—,

- 第28回日本看護学会集録 小児看護, 161—163, 1997
- 69) 追久保文, 他: 手術室における麻酔導入までの親同伴による児への効果, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 28—30, 1997
- 70) 笹木志津江, 他: 小児の抑制についての思いと認識—母親と看護婦のアンケート調査より—, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 69—71, 1997
- 71) 佐々木綾子, 中村圭佐: 産科管理体制の違いが母子関係・新生児意識レベルに及ぼす影響の検討, 母性衛生, 38 (4), 421—432, 1997
- 72) 佐藤幸子, 他: 先天性ミオパチー患児と家族への援助—コンサルテーションリエゾンを受けて—, 第28回日本看護学会集録 小児看護 48—51, 1997
- 73) 田中礼子, 他: 母の養育不良により1歳9カ月まで母乳のみで育った児への援助, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 24—27, 1997
- 74) 内田陽子, 鈴木純恵: 長期入院予後不良患児とその家族にとつての院内学級の意義とその関連要因, 第28回日本看護学会集録 小児看護, 117—119, 1997
- 75) 綿貫恵美子, 鈴木こずえ: 月齢1カ月の乳児を抱える母親の育児不安に関する一考察, 母性衛生, 38 (2), 227—232, 1997
- 76) 山崎あけみ: 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念—「母親としての自己」・「母親として以外の自己」の分析—, 日本看護科学会誌, 17 (4), 1—10, 1997
- 77) 矢代顕子: ダウン症出生に伴う母親の障害受容—4事例の転機について—, 母性衛生, 38 (2) 218—226, 1997
- 1998年
- 78) 江藤宏美: 生後6週間の正常児の睡眠・覚醒と足底皮膚温, 日本看護科学会誌, 18 (3) 67—75, 1998
- 79) 岩田裕子: 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因, 日本看護科学会誌, 18 (3), 21—36, 1998
- 80) 木戸久美子, 内山和美: NICUを退院した児を抱える母親の胎児感情に関する実証的研究, 母性衛生, 39 (1), 114—119, 1998
- 81) 河野洋子: 産褥期の母子相互関係と看護の構造 (第1報)—母乳栄養に関する看護過程の分析—, 母性衛生, 39 (1), 71—80, 1998
- 82) 内藤直子, 他: 0~3歳の乳幼児を持つ「専業母親」の子育て観尺度開発に関する研究—CPS-M 97の妥当性・信頼性の検証—, 日本看護科学会誌, 18 (3), 1—9, 1998
- 1999年
- 83) 萩原治子, 他: AML末期患児の疼痛評価—母親参加のフローシートからの分析—, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 171—173, 1999
- 84) 畠 美木, 他: 神経性食思不振症児への看護介入の検討, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 61—63, 1999
- 85) 井倉あゆみ, 他: 手術を受ける子どもを持つ母親の不安—予後からみた違い—, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 17—19, 1999
- 86) 北 友代, 他: 重症心疾患患児を持つ父親の愛着形成確立への援助, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 49—51, 1999
- 87) 清田幸子, 他: 母親の精神的安定を目的とした父親への関わり, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 58—60, 1999
- 88) 味田ちおり, 他: 入院中の児に付き添っている母親の意識調査—身体の清潔に対する援助について—, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 32—34, 1999
- 89) 村松光子, 他: 東京都在宅重症心身障害児(者)の訪問看護事業の現状と評価, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 93—95, 1999
- 90) 中野渡郁子, 他: 児の発熱に対する母親指導の評価—1年後の追跡調査から—, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 46—48, 1999
- 91) 中田秀美, 他: プロムフェンスを装着し早産に至った母体の反応と児との関わり, 第29回日本看護学会論文集 母性看護, 161—163, 1999
- 92) 小野千代子, 他: 乳幼児を持つ母親が初回入院時に求める情報と実際に得た情報の分析, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 29—31, 1999
- 93) 大高恵美, 他: 双子を持つ家族への育児支援—看護職の双子の育児に関する情報提供の実態から—, 第29回日本看護学会論文集 母性看護, 118—120, 1999
- 94) 押田ふじ子, 他: 家族のもてる力を重視した乳幼児期の在宅人工換気療法への援助, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 99—100, 1999
- 95) 菅沼明美, 他: 重症新生児仮死患児を持つ家族の受け入れ過程と医療者の関わりからの分析, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 136—138, 1999
- 96) 鈴木麻里子, 他: 妊娠30周に甲状腺クリーゼを発症した若年初産婦への援助, 第29回日本看護学会論文集 母性看護, 24—26, 1999
- 97) 高橋美砂子, 他: 共働きの父親の育児家事行動の実態と役割との関連, 第29回日本看護学会論文集 母性看護, 121—123, 1999
- 98) 田村ひとみ, 他: NICU長期入院児の両親への愛着形成・不安軽減のための援助, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 112—114, 1999
- 99) 谷口美沙, 他: 出生前診断にて胎児の多発奇形を指摘された両親への援助—「親と子の関係性の発達モデル」を用いての取り組み—, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 127—129, 1999
- 100) 豊田ゆかり, 他: 親準備性に関する男女の意識—妊娠期の夫婦の意識調査から—, 第29回日本看護学会論文集 母性看護, 124—126, 1999
- 101) 内村洋子, 玉置悦子: 手術を待つ親の思いと過ごし方, 第29回日本看護学会論文集 小児看護, 20—22, 1999